

一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム

「林業地連携ラボ」

(大阪富国生命ビル 4 階 まちラボ E 区画)

2016 年度 (運営 1 年目)

運営報告書

2017 年 1 月 23 日

一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム

事務局長 加藤久明

目 次

1.一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアムについて：「山からのイノベーション」を目指すための場	2
2. 大阪富国生命ビル4階 「林業地連携ラボ」について	4
3. 「林業地連携ラボ」オープンから現在までの流れ	10
4. 「林業地連携ラボ」に来られる来客者の皆様から得られた意見の集約	24

1. 一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアムについて:「山からのイノベーション」を目指すための場

地域創生連携活動コンソーシアムは、国土の7割を占める森林、それを支える林業や地域の未来に危機感を持つ有志と地域が結集し、1つの地域だけでは十分に対応しきれない地域活性化の現状という課題を、将来に向けた「物づくり」と「人づくり」を通じて共に解決していくことを目的としています。2015年3月から有志数名をスターティングメンバーとした検討を開始し、議論を重ねていく中で様々な人・地域を巻き込みながら構想を具体化していきました。そして、代表的な林産地である鳥取県智頭町と熊本県小国町を結び付けながら、自治体、森林組合、研究者、建築士から成る「一般社団法人 地域創生連携活動コンソーシアム」を2016年4月に立ち上げました。

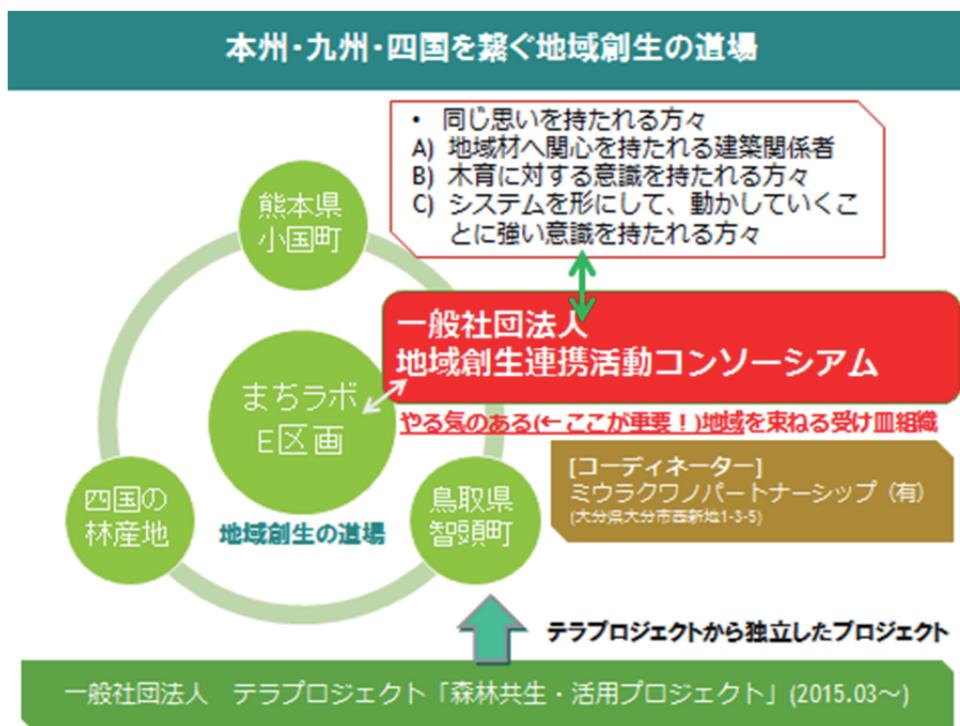


図 1-1 地域創生連携活動コンソーシアムの概要

このコンソーシアムの基本は、地域の「創生 (=活性化)」と「連携」という2つのキーワードを核として、「活動」を起こしていくことにあります。それは、意識ある関係者たちが幅広い知見と議論を重ねて培った意見やアイデアを主張するだけでなく、「事業として広く他者・他地域に示すこと」、「失敗を重ねながら小さな勝ち点を重ねていく」場であるとも言えます。特に、地方創生が叫ばれる昨今においても、多くの地域における取り組みは、「情緒的な要素」に訴えるものが多いのが現状です。しかし、情緒的な要素はあくまでも一時的なものに過ぎません。むしろ、地域の歴史から培われた「本流」となる要素を見出し、それを糧とした将来の地域創生に向けた投資を設計し、ゴールを設定した上で覚

悟を決めてこれを行い、地域の足腰を強化する活動を進めることが必要です。

私たちは、「何らかの行動しなければ前には進めない」ことをよく知っています。しかし、前に進むことは、時に様々な失敗や反省点が明確化し、それに向き合うことを意味しています。そのような時に、1つの地域に止まらない、他の地域との連携があることで、互いに失敗や反省もすべて正直に受け入れながら、互いに切磋琢磨し、地域を支える人・モノ・組織の質的向上を目指します。

本州—九州—中国—四国を束ねるネットワークづくり



■ コンソーシアムが目指す連携は、隣近所の連携ではなく、「江戸と長崎をつなぐ」レベル

■ 大阪の中心部に位置する産学連携組織「テラプロジェクト」を軸に、西日本の林業地の雄が連携

■ ひとつの地域では変えられないことも、連携と競争の中で実現していく

1. 九州：環境モデル都市だけでなく、森林経営に関するイノベーションを数多く仕掛け続けている熊本県小国町
2. 中国：森林セラピーだけでなく、森林経営を機軸とした町づくりを仕掛ける鳥取県智頭町
3. 四国：イノベティブな森林経営の仕掛けづくりに取り組み、コンソーシアムで協働していただく林業地を募集中

図 1-2 コンソーシアムが目指す地域連携のイメージ

地域創生連携活動コンソーシアムの歴史：

- 2015年3月～2016年2月末：テラプロジェクトからの提案を受け、熊本県小国町と鳥取県智頭町を主体とした事業共創フェーズ
 - 2016年3月2日：2町を主体とした「キックオフイベント」実施
 - 2016年4月28日：一般社団法人としての登記が完了
 - 2016年6月1日：まちラボE区画において「林業地連携ラボ」事業をスタート
 - 2016年10月14日：発足記念シンポジウムを大阪大学中之島センターにおいて開催
- ↓
- 2016年度は、林業地連携ラボの構築、林業地連携ラボを活用した各種の営業活動、WOOD.ALC講習会(小国町森林組合)、新商品開発事業(智頭町役場・智頭町森林組合)などの活動を展開してきた

2. 大阪富国生命ビル4階 「林業地連携ラボ」について

地域創生連携活動コンソーシアムでは、「地域間連携による切磋琢磨」と「第3者に評価される場」として、発起地域である智頭町と小国町が中心となり、大阪富国生命ビル4階にあるテラプロジェクト・まちラボ内に活動拠点である「林業地連携ラボ」を2016年6月1日にオープンさせていただき、地域創生の活動拠点としています。具体的には、発起地域が歴史ある林業地であることを踏まえ、地域材や地域情報などの情報発信と各種の営業拠点としての人材交流の場として活用を行っております。

智頭町ブースの活動方針

- 町役場としての活動展開
 1. 町に関する広報資料の設置
 2. 企業向け森林セラピー事業の営業・広報活動
 3. 木育イベントの実施
 4. 観光交流事業の企画 (森林組合主催の智頭材見学ツアーとの連携を予定)
 5. 移住定住相談会の広報
 6. 森林に関連した新商品開発のための意見交換会

- 森林組合としての活動展開
 1. 試作商品の展示
 2. 地域材展開に必要な営業活動→各種の商談ならびに地域材理解を深める活動
 3. 地域材販売促進・PR事業の企画

小国町ブースの活動方針

- 材に関する展示や販売促進
 1. 集成材を活用した大型非木造：WOOD.ALCに関する事業
 - ・ 中小規模の建設業をターゲットとした普及活動
 - ・ 西日本 WOOD.ALC 普及協会とのコラボレーション
 2. 杉を使ったアロマに関する事業：
 - ・ 直販システムなども使いながら、アロマの展開・広報を実施
- ◆ イベント活動
 1. Wood-ALC 普及に向けた活動を展開する
 - ・ Wood-ALC 普及のためのセミナーを行う予定
 2. 小国町から大阪へ商品販売に来る方々との連携
 - ・ 小国から発信をする人々を応援する仕掛けづくり

我が国の森林、それを支える林業や地域が危機に瀕していることは、すでに多くの人に知られていることです。また、長年に渡り、国レベルだけでなく、様々な地域において問題解決が試みられてきましたが、未だに有効な突破口を得るには至っていません。しかし、戦後 70 年を経て伐採期を迎えた国産材の活用を実現しなければ、良い木を育ててきた地域の何代にもわたる歴史が途絶えてしまいます。

だからこそ、歴史ある林業地の雄である 2 つの町が、西日本をキーワードとして連携し、大阪に出て活動をするということには、大きな意味があります。



図 2-1 「林業地連携ラボ」(大阪富国生命 4 階・E 区画)《左側：小国町／右側：智頭町》

西日本の中心に出ることによって、どのように地域の誇れる資源である地域材を知ってもらうのか、ということが課題になります。この課題解決の方法として、林業地連携ラボでは、当初の検討段階から「地域材のショールーム」として、発起地域の材を使った展示ブースを構築し、「地域の誇る材を実際に見て、触ってもらいながら深く知っていただく」ことを事業戦略に組み込んでいました。具体的には、小国杉と智頭杉を使った展示ブースを構築し、そこに様々な企画展示や製品サンプルの展示をするというものです。この点については、コーディネーターを務めていただいている、ミウラクワノパートナーシップ有限会社の三浦逸朗様に基本デザインから設計までをトータルにコーディネートしていただきました。



図 2-3 林業地連携ラボのブース原型模型
(設計：ミウラクワノパートナーシップ有限会社)

色々な参加地域の皆様を交えた議論や紆余曲折を経て、2016年9月にまずは小国町ブースから施工に入り、同年9月18日に残りの智頭町ブースの施工を終え、ようやくコンソーシアムのベースが出来上がりました。



図 2-4 智頭町ブース
(設計：ミウラクワノパートナーシップ有限会社／施工：株式会社 菅原建築)

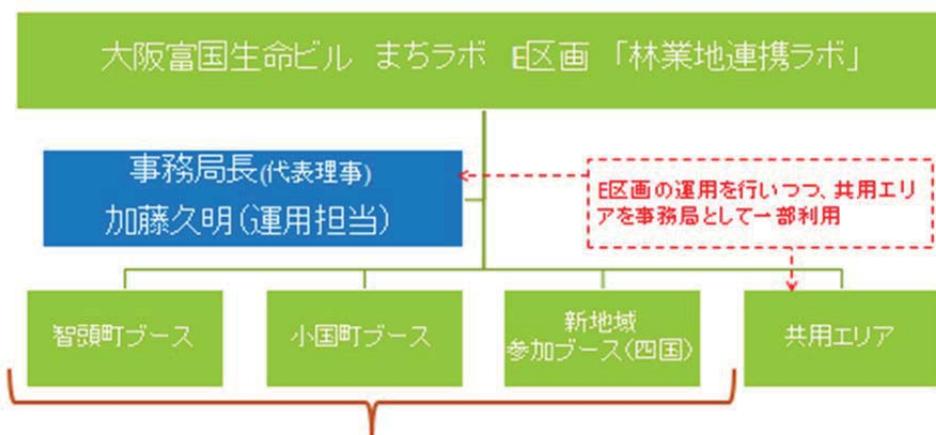


図 2-5 小国町ブース

(設計：ミウラクワノパートナーシップ有限公司／施工：株式会社 ビエント大阪)

日常における運用は、事務局長である加藤久明（大阪大学産業科学研究所特任助教）が運用を担当させていただき、参加地域の材に関する営業なども行っております。

「林業地連携ラボ」の運用体制



コンソーシアム事務局長が運営支援

(林業地連携ラボにおける参加地域の営業・企業面談などを含めた支援活動全般)

図 2-6 林業地運営ラボの運用体制

地域創生連携活動コンソーシアムの事業目的：みどり豊かな国土を創成するために林野を整え、豊かな生活圏を実現するために、地域連携を通じて、新しいモノ・コトづくりに関わる活動を社会実装に繋げることを主たる目的としています。この目的を達成するために、以下のような事業を想定しています。

- (1) 地域の特性を活用し、その強みを相互に連携・強化することにより、地域間の発展に繋がるモノ・コトづくりに資する事業
- (2) 参加地域が有している森林資源の持続活用法に資する事業
- (3) 地域の森林資源を多面的に活用するために、公設森林組合および組合が住所を置く自治体が協力をしたモノ・コトづくりに資する事業
- (4) 地域創生を目指す中小自治体を持つ多様な潜在力を、大都市におけるニーズと結びつけることによって創造される新事業を支援する事業
- (5) 当法人が取り組むプロジェクトに参加する組織、個人を支援すると同時に、新たな協働となる新規プロジェクト設立を支援する事業
- (6) 参加する地域組織により、共同運用される事業所の維持・管理事業
- (7) 各種の人材育成・人材交流に関わる事業
- (8) その他、主たる目的ならびに上記の事業に関連する一切の事業

「林業地連携ラボ」の概要：

・活動拠点：大阪富国生命ビル4階 テラプロジェクト・まちラボ E区画
(〒530-0018 大阪府大阪市北区2番4号)

※テラプロジェクト・まちラボについては、一般社団法人 テラプロジェクトさんの Web サイト (<http://thera-projects.com/>) をご覧ください。

・営業時間：10：30～19：00

・定休日：木曜日、日曜日

(それ以外は弊社団の会議などの都合に応じて不定休)

3. 「林業地連携ラボ」オープンから現在までの流れ

3.1 仮オープン（2016年6月1日～8月末）

「林産地連携ラボ」は、2016年6月1日（水）に開設されました。同年4月の法人設立後、すぐにラボを開設する予定でしたが、参加地域のひとつである熊本県小国町が熊本地震による影響を受けていたことなどを考慮し、6月からの仮オープンとなりました。このような前例のない、大阪の中心部に位置する産学連携拠点に地域創生の活動拠点をオープンする上で、発起地域の皆様だけでなく、様々な方々から多大なるご支援を賜りました。

2015年3月から事業の検討を開始し、1年と3か月近くを経て拠点事業を開始することができたことには、「林業の現状はもはや待ったなしであり、何か現状を変えていくために共に考え抜き、汗を流さねばならない」という共通認識が醸成されたことが大きかったと言えます。そして、その背景としては、発起地域である智頭町および小国町が歴史を有した林業地であり、地域資源としての林業に対する危機意識と課題解決への意識を持っていたことが大きかったと言えます。



図 3-1 仮オープン初日



図 3-2 仮オープン時の智頭町ブース



図 3-3 仮オープン時の小国町ブース



御祝 富国生命保険相互会社より



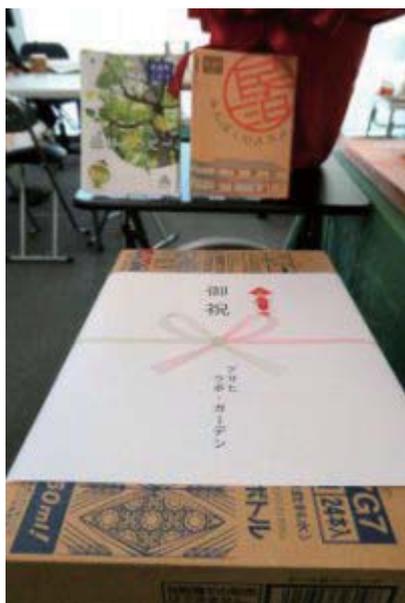
御祝 清水建設株式会社より



御祝 株式会社シミズ・ビルライフケアS・
BLC 関西社より



御祝 智の木協会より



御祝 アサヒ ラボ・ガーデンより



写真右 御祝 株式会社紀文食品より
写真左 御祝 羽衣国際大学より



御祝 智頭町森林組合より



御祝 小国町役場より



御祝 株式会社 谷岡ドレスより

図 3-4 各種の御祝



図 3-5 ガラスショーケースにおける木製品展示（左側：小国町／右側：智頭町）



図 3-6 仮オープンから数日後の風景



図 3-7 打ち合わせ風景



図 3-8 『日本海新聞』取材記事（2016年9月22日号；取材は同年8月23日）

3.2 ブース構築作業 第1弾：小国町ブース（2016年9月4日）

コンソーシアムに参加地域の皆様を交えた議論や紆余曲折を経て、2016年9月4日、地域材のショールームとしての本格的なブースの施工を開始しました。最初のブースは、小国杉を使った小国町ブースでした。





図 3-9 小国町ブースの施工風景



図 3-10 小国町ブース (ver.1)

3.3 ブース構築作業 第2弾：小国町ブース（2016年9月18日）

2016年9月18日には、智頭町ブースの施工を行い、コンソーシアムの活動事業のベースが出来上がりました。どちらのブースも、「西日本の中心である大阪において、最も規制の厳しいビルである大阪富国生命ビルで、前例のない地域材による展示ブース設置を実現した」という点で、地域材活用の画期的な事例となりました。





図 3-11 智頭町ブースの施工風景



図 3-12 参加地域のブースが完成した直後（左：小国町／右：智頭町）

3.4 発足記念シンポジウムにおける内覧会（2016年10月14日）

林業地連携ラボ完成の翌月、2016年10月14日に大阪大学中之島センターにおいて、発足記念シンポジウムを開催しました。当日は、地方創生のコンセプトを提唱し、実践されてきた石破茂先生のご講演をいただき、パネルディスカッションでは、林材ジャーナリストである赤堀楠雄様を交えて、林業起点のイノベーションに関する議論を行いました。その際に、ブースの内覧会を行いました。

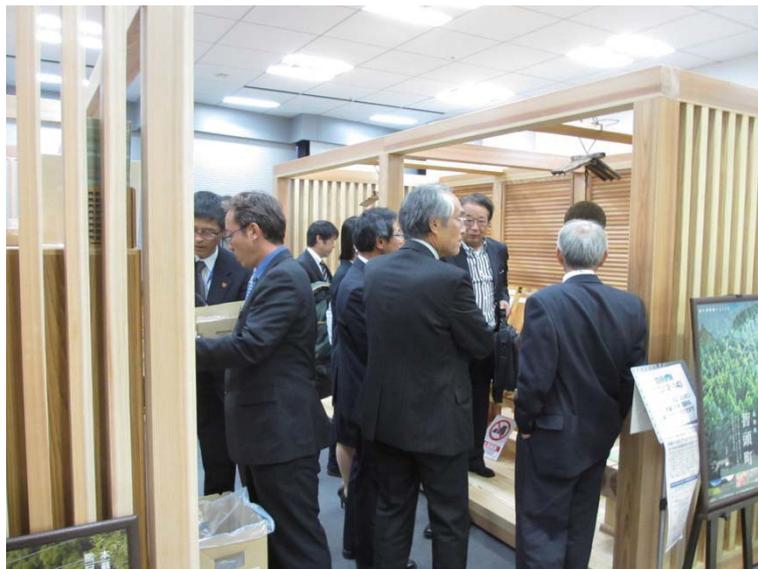


図 3-13 発足記念シンポジウムにおける林業地連携ラボ内覧会の風景

3.4 小国ブースのアップデート（2016年10月13-14日）

小国町ブースは、ブースの完成以来、コンソーシアム事務局が使っていた仮設什器などを一部引き受けてくださっておりました。しかし、発会記念シンポジウムに合わせて計画に従った完成系への改装を行うこととなり、アップデート作業が行われました。具体的には、(1)展示物の展示方法の大幅な変更、(2)これに合わせた棚の取り付け、などが中心となりました。



図 3-14 小国町ブースの改装作業風景



図 3-15 改装後の小国町ブース



図 3-16 改装後の小国町ブース

3.5 参加地域関係者訪問：小国町森林組合 役員訪問（2016年9月27日）

智頭町森林組合 役員訪問（2016年11月7日）

林業地連携ラボの発足当初から、各自治体の大阪事務所関係者、鳥取県および熊本県関係者、企業関係者など多くの方々にご訪問をいただいておりますが、参加地域の森林組合や町役場の方々からもご訪問をいただいております。2016年には、発足記念シンポジウムの前後を挟む形で、小国町森林組合と智頭町森林組合の役員の皆様にご訪問をいただき、意見交換をさせていただきました。



図 3-14 小国町森林組合 役員の皆様によるブース視察



図 3-15 小国町森林組合 役員の皆様との意見交換会

智頭町森林組合の役員の皆様が訪問をされた際には、コンソーシアム理事である寺坂組合長自ら説明をされ、「この大阪のコンソーシアムを通じて様々な得られたことを、メリットも反省すべき点もすべて受け入れ、前に進んでいく」という決意を示されました。





図 3-16 小国町森林組合 役員の皆様による訪問と寺坂組合長による説明

4. 「林業地連携ラボ」に来られる来客者の皆様から得られた意見の集約

2016年6月のオープン以来、来客者の皆様からは、色々なご意見をいただきながら現在に至っております。

来客者の皆様が対応をする事務局にくださる意見は様々ですが、

- (1) 「本物の優れた木」が持つインパクト：見た目という視覚情報、実際にブースに触れた時の触覚情報、杉が持つ香りという嗅覚情報
- (2) 「地域材が床材・柱・壁となって実際にブースという空間を構成し、自由に触れることができる」という前例のない空間：地域材に関する抽象的なイメージを持つ人々に、「歴史ある林業地の材をどのように使うと良いのか」というイメージを与える地域材への理解深化機能
- (3) 「歴史ある林業地を知ることへの新鮮な驚き」：森や木に関する安易なイメージがインターネットやテレビを通じて氾濫しているが、林業地が持っている様々な地域資源だけでなく、林業の実態を知ってもらうという地域社会への理解深化機能が特に大きいと思われまます。

地域の理解については、それぞれの町の広報資料を配布しておりますが、智頭町ならびに小国町共に様々な資料を配布しており、6月のプレオープン時からイベントや来館者向けに数百部の資料を配布している実績があります。その意味において「材だけでなく、地域情報発信の拠点」となっております。

以下に、様々な来客者の皆様からいただいた意見や得られたことを抜粋します。

- 「ブース全体から木の香りするのが良い」（巡回されている警備の方々だけでなく、多くの一般来館者の方々からいただきます）
- 「地域創生連携活動コンソーシアムは、大阪富国生命ビル4階にある竹中庭園緑化、アサヒラボガーデンさんの間に位置しているが、本物の木を使ったブースのインパクトは大きく、来館者の動線を考える上でもとても重要。ビル内のテナントを意識しない人も通りがかった時にも目につく視認性の高さは重要だと思われる。特に、目から見える情報は大きいと思う」（株式会社シミズ・ビルライフケア S・BLC 関西社 宮永様）
- 智頭町森林組合および小国町森林組合に共通した来客者の問い合わせ：「カタログには無いのだが、例えば机や棚を作ったら幾らぐらいかかるのか？」
→いくつか例示的なケースを示して、「このようなものを作ると、お手元に届くまで

に期間はこの程度、価格はこの程度ですよ」という情報をお伝えしながら、各組合が作成しているカタログ情報などを活用して事務局が対応している。

- 智頭町および小国町に共通してある質問:「どのあたりに行けば良いおススメの森が見られますか?」(一般来客者の方々)
→町の資料を使いながら事務局から個別に解説をしながら対応をしている。
- 智頭町の場合、「民泊」への興味を示される来館者が多く、比率的には圧倒的に女性の来館者のほうが多かったように事務局では記憶をしております。
- 「智頭町」や「小国町」といった「具体的な町」という存在への認知拡大
→「どこにあるの?」「どのように行けるの?」「何があるの?」という一般の方の質問が多くあり、質問に答えながら町の資料をお持ち帰りいただき、観光などを検討してもらうことが多い。事務局としては、**交流人口増加**を狙っている。
- それぞれの地域の出身者が改めて大阪において、「智頭町」や「小国町」といった地域の存在を再認識してくださる
→智頭町の場合、八頭郡のご出身の方などを含めて、大阪在住の鳥取県人の方々が「おっ、智頭じゃないか」と言って親しみを持って立ち寄ってくださいます。
→小国町の場合、熊本県出身者の方々などがお立ち寄りくださるだけでなく、来訪者から関西圏における小国杉の隠れた使用先が発掘できた事例などもありました。
- 2016年は熊本県ならびに鳥取県が大きな地震の被害に見舞われたこともあり、ブースに立ち寄られて地域のご心配をしてくださる来館者の方々が多くいらっしゃいました
- 智頭町の木製品に関する来館者の質問:家具などについての質問、どのような製品がどの程度の価格でオーダーできるのか?という質問がありました。これについては「価格帯がわかると手を出すことができる」という来館者からのフィードバックがいくつかありました。
- 智頭杉の仏壇については、ご年配のご夫婦を中心に、仮オープン時から多くの問い合わせをいただきました。展示方法や解説資料などについては、森林組合と共に色々な改善を試みてきました。
 - (1) 「この仏壇、どうやって使うのでしょうか?」という質問がよくあります。これは、コンセプトを説明すると「なるほど」と理解をしてくださりました。
 - (2) 「マンション住まい、長男ではない次男さまなどのご家庭」の方に好評でした
 - (3) 「色が良い」という評価が多くありました。これについては、「普通の仏壇は黒く

てどうにも暗いし、インテリアに馴染まないし…」という女性の来館者からのコメントがいくつかありました。

- 小国町の様々なアロマや木のおもちゃなどの小物については、女性の方々を中心として、小物に対する興味と質問が多く、イベントでの物販などでも一定の売り上げに繋がることができました。
- 男性の来館者は、材に関する質問をされる方が多くいらっしゃいました。現在では、色々な知識をインターネットで得られることもあり、来館者によっては細かい材の特性などに関する専門的なご質問をされる方が月に数名ほどいらっしゃいました。
- 小国町森林組合が中心となって西日本での普及を進めている WOOD.ALC については、来館者の方々から好意的な意見をいただいております。「マンションやアパートの経営をしているのだが、建物の個性付けに良いと思う」、「法定耐用年数などの情報がわかると、銀行からの融資などを考える上でとても良い」、「山持ちであるのだが、自分が山を持っている地域がこのような技術を使うことで、地域活性化につながるように思える」といった色々な意見をいただいております。